

江田三郎研究序説

An Introduction to Socialism of Saburo Eda

岡田 一郎
Ichiro Okada

1. はじめに

2007年10月12日、55年体制の成立以来、野党出身で初の参議院議長となった江田五月の主催で江田三郎の生誕100周年・没後30周年を記念するシンポジウムが開かれた。江田三郎は、江田五月の父であり、55年体制下で万年野党と揶揄された日本社会党（以下、社会党）内において、社公民連合政権構想などを打ち出し、政権交代の可能性を求め続けた政治家として知られている。

図らずも、民主党が参議院第一党に躍進し、政権交代の可能性が高まったことで、このシンポジウムは時宜に合ったものとなった。しかし、シンポジウムにおける報告者の報告もその後のマスコミにおける取り上げ方も江田三郎（以下、江田とのみ表記）の思想の今日的意義を十分汲み上げていたとは言い難い。

たとえば、報告者の1人である山口二郎（北海道大学教授）は、江田の思想を「人間の顔をした資本主義」を求めたものと評した。しかし、これはかなり違和感の残る評である。確かに、江田は、既存の資本主義を、人間が暮らしやすい姿へと修正していくことを求め続けた。しかし、資本主義社会に発生する矛盾を1つずつ解消していくことを江田は社会主義運動と捉えており、あくまで江田が求めていたのは「資本主義」ではなく「社会主義」であった。

また、『朝日新聞』の大室一也記者は、江田の思想を社会民主主義として捉え、上記のシンポジウムを紹介する記事の中で、新自由主義に対抗する思想としてリベラリズムではなく、江田が唱えたような社会民主主義思想を見直すべきであると主張している。⁽¹⁾だが、江田が自らの思想を「社会民主主義」と呼んだのは、最晩年のことであり、江田は生涯、自らの思想を「社

会主義」と表現していた。死の直前におこなわれた菅直人との公開討論においても、江田は自らの政治の原点を「社会主義」としており、菅に「別に社会主義と言わなくてもいいのではないですか」と言われるや、「君ら若いもんには分らんだろうが、ぼくの長い人生で社会主義はとてつもなく重要なんだ」と反論し、「社会主義」に強いこだわりを見せている。⁽²⁾

江田の思想が今日、正しく理解されていないのは、江田に関する言説の多くが、江田に対して思い入れの深いシンパの人々によるものが圧倒的多数を占めているという現状に起因するのではないだろうか。思い入れの深さゆえに各自が勝手に自分に都合の良い江田のイメージを自分の頭の中で作り上げ、それが一人歩きして、後世の人々に実際の江田とは異なる像を伝えていると思われる。

一方、江田の思想は江田とはゆかりのない研究者の手によっては、未だ十分には分析されていない。管見の限りでは、江田の思想の研究としては空井護のそれがあるのみであり、それも江田の政権獲得構想を分析したものである。江田の思想の根底に存在した社会主義思想を分析したものではない。⁽³⁾空井の研究以外には、江田個人を取り上げた書物として、江田の側近等によって編まれた追悼集（「江田三郎」刊行会編『江田三郎—そのロマンと追想—』同刊行会、1979年）・ジャーナリストによる伝記（塩田潮『江田三郎—早すぎた改革者—』文藝春秋、1994年）・江田ゆかりのジャーナリストや政治家、研究者等が江田への思いをつづった書物（北岡和義責任編集『政治家の人間力—江田三郎への手紙』明石書店、2007年）があるのみである。

本稿では、江田の言動をそれが発表された時代状況も考察にいれながら様々な角度から分析し、

江田が抱いた社会主義思想の大まかな姿を明らかにしていきたい。そして、江田の社会主義思想が現代社会においてどのような意義を持つのか、考察したいと思う。

2. 構造改革論と江田ビジョン

江田の思想を考察する上で欠かすことができないのが、彼が1960年代初頭に提唱した構造改革論である。

構造改革論とは、部分的改良を積み重ねて社会主義を実現しようという考え方である。それまで、不明確であった社会党の政権獲得の道筋を明らかにした理論ということで若手活動家を中心に受容された。この構造改革論は1960年10月11日の社会党中央執行委員会で採択された運動方針案「総選挙の勝利と前進のために」に盛り込まれた。この中では、構造改革の中心目標を「資本主義経済のワケ内で実施されうる」と規定し、合わせて日本国憲法を基準として社会主義への移行をめざすことも宣言された。(4)当時、社会党書記長として構造改革論に基づく運動方針案の作成に携わっていた江田は、中央執行委員会の翌日に浅沼稲次郎委員長が暗殺されると、委員長代行に就任。社会党の機関誌『月刊社会党』で、自民党の政策を批判するだけでなく、自民党政権下でも実現し得る政策を訴えていこうと主張した。(5)

一方、社会主義政権の樹立による日本の根本的な変革を主張していた社会党最左派の社会主義協会は、構造改革論を保守勢力と妥協する改良主義として強く反発した。たとえば、社会主義協会の代表、向坂逸郎は、1962年の社会党大会で「江田君はね、左派の、実にいい社会主義者だった。それがあんなに改良主義に染まっていったのは、君たちマスコミが悪い」「江田君たちの構造改革論を、君らマスコミがおだてるものだから、江田君もすっかり右のほうへ行ってしまった」(6)という言葉をもマスコミの記者に向かって語っている。

そして、社会主義協会の江田に対する攻撃に、江田が属していた社会党鈴木派の領袖・鈴木茂三郎や鈴木派の重鎮・佐々木更三らが同調した。第21回定期大会（1962年1月20～22日）では、構造改革論は左派系の代議員の圧力で「これを

今日の段階において、戦略路線としてただちに党の基本方針としてはならない」(7)と決定された。そして、新たに社会主義理論委員会を設置し、社会党の新しい路線を決定することとなり、綱領的文書「日本における社会主義への道」が1964年に作成される。しかし、その後も社会党内では江田の構造改革論を支持するグループとこれに反対するグループが対立することとなった。この対立を構造改革論争という。

構造改革論によって、江田は社会党内で左派の教条主義にとらわれず、新しい社会主義のあり方を模索する政治家として歴史に名を残すことになる。一方で、江田は社会党左派を中心とする左翼陣営から「改良主義者」「日和見主義者」と攻撃されていくこととなった。

だが、構造改革論というのは、向坂らが非難したような内容だったのだろうか。空井は、構造改革論が唱える自民党政権あるいは資本主義のワケ内での政策の実現とは、社会党を支える広範な大衆闘争の存在を前提にしたものであり、社会主義革命をも視野にいれた理論であったと指摘している。(8)また、マルクス・レーニン主義的として今日では批判されている「日本における社会主義への道」と構造改革論との共通性・連続性も指摘している。(9)

空井の指摘は的を射ているように思われる。現に、江田は1968年に久野収との対談で、「私どもが提起した構改路線の基本精神は、例の理論委員会の報告『日本における社会主義への道』に消化され、生かされていると思います」(10)と述べている。また、江田は1967年に雑誌のインタビューで、条件付ながらプロレタリア独裁を認めている。(11)

少なくとも1960年代後半の時点では、江田は、今日の我々が言うところの議会制民主主義者ではなかった。したがって、政権交代を自明の理とする西欧型の社会民主主義者でもなかった。江田の言動は、彼がかつて属した社会党左派の平和革命路線からいささかも逸脱してはいなかったのである。

にもかかわらず、江田はなぜ改良主義者・日和見主義者の烙印を押されたのだろうか。

その原因として、江田を取り巻く当時の社会党の情勢が挙げられる。江田は社会党の最大派

閥・鈴木派に属し、鈴木派の支持を受けて1960年に書記長に就任したが、当初、書記長には佐々木が想定されていた。しかし、最右派の西尾派が社会党を離党し、さらに同じ右派である河上派が領袖の河上丈太郎を委員長選挙に擁立する中で、浅沼を委員長に推す鈴木派としては、河上派や和田派から反発を受ける佐々木を書記長に推して、さらに河上派との対立を深めるわけにはいかなかった。そこで、より党内に敵が少ない江田が暫定的に書記長に選ばれたのである。(12)しかし、暫定的な書記長という鈴木への思惑を超えて、長く書記長の座に居続ける江田は鈴木・佐々木から警戒感を持たれていた。1961年、佐々木が向坂を仙台に招聘し、1955年の再統一以来、対立関係にあった社会主義協会との関係を修復した。(13)佐々木派・社会主義協会が江田を攻撃するために、改良主義者のレッテルをあえて貼った可能性は高い。

また、1960年の総選挙の際に、江田が委員長代行として3党首テレビ討論会に出席し、国民的人気を得たことも江田のイメージを浮つたものにした可能性がある。江田の人気は江田がジューサーを使った写真が週刊誌に掲載されただけでジューサーの売り上げが月400台から月10万台へと250倍に増えたというエピソードが残る程の驚異的なものだった。(14)そうした江田の人気もあり、1960年総選挙で社会党は23議席を増やしたが、向坂は江田の選挙のやり方を浮動的な個人の人気に頼るものとして不快感を持ち、選挙後、「江田君のムード選挙は社会党のマイナスであり、むしろ敗退したほうが長期的には党のためによかった」(15)という言葉を残している。

江田ビジョンもまた江田のイメージに大きな影響を与えたであろう。江田ビジョンとは、1962年栃木県日光市で開かれた社会党全国オルグ会議において、江田が発表した日本の社会主義が目指すべき目標である。江田は社会党が目指すべき未来像として「アメリカの平均した生活水準・ソ連の徹底した社会保障・イギリスの議会制民主主義・日本の平和憲法」を挙げ、それらを自分たちの視点に組み入れることによって新たな社会主義への道が開けると説いた。(16)この演説は後に『エコノミスト』に論文としてまとめられて掲載されたが、従来の社会主義の

概念にとらわれない江田の構想は大きな反響を呼んだ。(17)江田ビジョンはオルグ会議の前日、ブレーンの学者たちとの勉強会において、ブレーンの1人が提唱したものであるが、江田の側近たちは他派閥の反発を恐れて党内手続きを踏まずに発表することのないよう江田に進言している。(18)側近たちが危惧したように、佐々木派・社会主義協会だけでなく、江田と協力関係にあった和田派内部からも反発の声が上がった。(19)江田ビジョンは江田の国民的人気を不動のものとしたが、安保闘争の余韻がまだ冷めていなかった当時、「アメリカの平均した生活水準」を目標に掲げることは闘争心を忘れていた証拠であると党内ではみなされたのである。江田はこの江田ビジョンに対する党内での反発を理由に、1962年の第22回定期大会（11月27～29日）で書記長を辞任している。

また、社会党の組織の観点から考察すると、1958年に提唱された信託者党员制度もまた江田に改良主義者のイメージを与える遠因になったかもしれない。1958年総選挙で思ったほど議席が伸びなかった社会党は、機構改革に着手し、その一環としてオーストリア社会党が採用している信託者党员制度の導入による党员拡大が検討された。信託者党员制度は、党员を負担の軽い一般党员と党活動を担う活動家党员に分け、一般党员が納める党費で活動家党员の活動費をまかなおうという制度である。負担軽減による党员拡大と活動家の地位の安定を狙った提案だが、この導入に積極的だったのが江田で、これに最後まで反対したのが向坂であった。この提案がおこなわれた直前、オーストリア社会党はマルクス主義を放棄していた。向坂はマルクス主義に批判的な党员が増えることで、社会党もまたマルクス主義を放棄することを恐れたのである。(20)この制度は右派の支持も得られず採用されなかったが、このころから江田と社会主義協会の考え方の間にズレが生じるようになったといわれている。(21)

3. 高度経済成長政策への抵抗

改良主義者のレッテルを貼られながら、あえて江田が構造改革論や江田ビジョンを提起し続けた背景には当時の池田勇人首相の「所得倍增論」

があったことは間違いない。

池田内閣成立直前、社会党が安保闘争の予想以上の盛り上がりにはわく、江田は岸信介内閣が総辞職すれば闘争は急速に沈静化すると予測していた。(22)江田が予想した通り、岸内閣が総辞職した後に成立した池田内閣は改憲を棚上げし、所得倍増論によって国民の意識を政治から経済へと向けさせることに成功した。社会党が得意とする憲法問題が政治の争点からはずされていく中で、政策の優劣で自民党と競おうとした江田の目論見は時代の趨勢に合致したものであったと言える。

所得倍増論によって経済的な豊かさを追求しようとする池田内閣への対案として、江田がまず提起したのが「生活の質の向上」である。1960年総選挙では、社会党は「誰もが牛乳3合は飲める生活の実現」いわゆる「牛乳3合論」を訴えた。(23)これは、日本国憲法第25条が保障する「健康で文化的な最低限度の生活」の実現を訴えたものであった。江田ビジョンも、所得倍増論に対抗したものともみることできる。

1967年に江田が刊行した『日本の社会主義』では、高度経済成長の時代には、もはや資本主義の発展にともなって貧困に追い込まれた労働者が社会主義を支持するようになるという窮乏化論は合わなくなったと指摘している。そのように時代に社会主義政党が取り組むべき課題として江田が新たに注目したのが、物価の上昇や都市における社会資本の貧しさなどであった。江田はこれらの問題を「新しい貧乏」(24)と名づけた。そして、江田が社会主義の優れた点として挙げているのが、その計画性である。無秩序な資本主義によってもたされた高度経済成長の矛盾を社会主義の計画性によって是正しようとしたのである。しかし、高度経済成長政策の負の側面がまだ十分認識されていなかった当時、江田が自民党に対して明確な対抗軸を打ち出せたとは言えない。

1969年には、江田が『日本の社会主義』でも触れていた公害問題が深刻な社会問題として国民にも認識されるようになり、経済成長の負の側面が誰の目にも明らかとなった。江田は側近の仲井富の進言を入れて、公害総点検運動を開始し、さらに『住民の公害白書』を発行して公

害問題を訴えた。(25)

その前年の10月に江田は書記長に復帰していた。1969年総選挙では、江田が選挙の陣頭指揮をとる社会党は野良仕事によって荒れた農婦の手や終電車の疲れたサラリーマンをクローズアップしたポスターを作成し、高度成長の負の側面を浮き彫りにしようとした。しかし、こうした広報戦略は有権者には不評であった。(26)高度経済成長の負の側面は認識され始めてはいたが、なお人々は前向きなイメージを望んだのである。広報戦略の失敗だけでなく、チェコ事件などの影響による社会主義イメージの低下、民間労組における社会党離れなどもあり、この選挙で社会党は140議席から90議席へと議席数を激減させる大敗を喫した。

1972年、佐藤栄作に代わって田中角栄が首相に就任した。田中は首相就任直前に『日本列島改造論』を刊行し、都市と農村の格差解消のために大規模な地域開発をおこなう必要があると訴えた。しかし、この主張に刺激されて日本全国で地価が高騰し、それにつられる形で消費者物価も上昇、狂乱物価と呼ばれるインフレーションを引き起こしたのである。

江田は田中に対抗して、1972年に『私の日本改造構想』を発表している。社会主義の計画性によって、公害をはじめとする環境問題・都市問題・食糧問題などの資本主義の矛盾を解決するという江田の根本的な思想はこの本でも変化していない。しかし、この本では、江田は『日本の社会主義』とは異なり、資本主義の矛盾の克服のために西ヨーロッパの社会民主主義者が果たした功績を率直に認めている。(27)また、大衆闘争を基盤にした平和革命ではなく、社会党・公明党・民社党3党による連合政権構想を提唱した。(28)一方で、日本共産党(共産党)に対しては、プロレタリア独裁をプロレタリア執権と呼び変えているものの、あくまでも政治的独裁を一般化しているとして激しく非難している。(29)

また、このころから江田は人間の自由をより強調するようになる。社会主義の特徴とされる産業の国有化も、国民の自由を保証しないならば否定すると言い切っている。(30)

1970年代に入って、江田がその思想的立場をやや西欧型の社会民主主義に移し、社公民路線

を打ち出した背景には社会党の党勢が著しく衰退し、他の野党との連合政権を樹立する以外に、社会党が政権を獲得する可能性がないという事情があった。

民社党はそのような見通しの下に1970年の年明け早々から江田への接触を開始していた。⁽³¹⁾ 公明党もまた藤原弘達（明治大学教授）に対する言論出版妨害事件で世論の非難を浴びており、他の野党との連携を必要としていた。民社党・公明党はともに共産党との関係は険悪であり、民社党・公明党との協力を模索する江田が共産党に対して批判的になるのは当然であった。

さらに江田が社公民路線を選択した背景として、江田派が共産党の勢力の強い西日本、特に大阪府を基盤としていたという事情も考えられる。このころ、革新政党出身の首長が全国で次々と誕生していたが、共産党の勢力が強い地域では、革新首長下で社会党の支持基盤が共産党に侵食されるという傾向が続いていたからである。⁽³²⁾

公民両党との連携の必要性からくる反共路線の他にも、江田の思想には大きな変化があった。それは市民運動を重視するようになったという点である。⁽³³⁾ その背景には公害問題に取り組む中で、市民運動の力量に触れたという事情が考えられる。が、それ以外にも労働者階級を中核とする社会主義革命をあくまで目指そうとする社会主義協会に対する対抗意識もあったであろう。1970年代には佐々木派に代わって社会主義協会が江田と激しく対立するグループの中心となっていた。社会主義協会に対する不満がこのころの江田の言葉のはしばしに顔をのぞかせるようになる。

しかし、西欧型の社会民主主義への漸進的な転換、社公民協調・反共産党路線、市民運動重視を特徴とする1970年代の江田の思想は側近たちにも理解されなかった。1960年代末から70年代初頭にかけて、1969年の総選挙大敗のあおりを受けて、多くの江田派の党本部職員たちが江田のもとを去っていたが⁽³⁴⁾、さらに1972年ごろには江田の反共産党路線に反発して多くの活動家や知識人が江田から離れていった。⁽³⁵⁾

それでも江田は1970年代を通して上記の路線をかたくなに貫いた。1976年2月7日、江田は自らの思想を実現するための政策集団「新しい日

本を考える会」を松前重義（東海大学総長）・矢野絢也（公明党書記長）・佐々木良作（民社党副委員長）らとともに立ち上げ、政権構想を発表した。江田の言動は党の路線から逸脱しているとして、社会主義協会はさらに反発した。第40回定期大会（1977年2月8~10日）で江田は社会主義協会系の代議員から激しく攻撃され、1977年3月26日、党内で孤立していた江田はついに1人で社会党を離党するに至るのである。⁽³⁶⁾

4. 江田三郎の「社会主義」とその意義

社会党を離党した江田が菅とともに社会市民連合を立ち上げるべく臨んだ公開討論会で、あくまでも「社会主義」という言葉にこだわったことについては既に触れた。それでは、彼が死の直前までこだわった「社会主義」とは一体どのようなものだったのだろうか。

同じ公開討論会で江田は自らの社会主義観について「私が社会主義とっているのは、ひとつの固定論や理想像を描いているわけではなく、現実には色々な矛盾がある、不合理がある、その一つ一つをどこまでもどこまでも正して行く終着駅のない社会主義運動という考え方です」⁽³⁷⁾と述べている。このような考え方は、かなり以前から江田が持論としていた考え方である。

たとえば、『日本の社会主義』では、江田は自らの社会主義観としてカール・マルクスの『神聖家族』の次の一節をひいている。

共産主義はわれわれにとって、作り出されるべき一つの状態ではない。また、現実がそれに準じなければならぬような一つの理想でもない。われわれが共産主義とよぶのは、現在の状態を廃棄させる現実的な運動のことである。この運動の諸条件は現実に存在する前提から生じる。⁽³⁸⁾

江田にとって「社会主義」とは、目の前に存在する矛盾を解消することであって、変更できない永久普遍の原理として存在するものではなかった。

ゆえに、これまで見てきたように高度経済成長の進展によって、江田が掲げる社会主義像の姿も変転していったのである。

社会主義とは対照的な思想であるが、アメリカの保守主義もまた情勢の変化に応じてその内容を変化させながら、江田が言うところの終着駅のない運動よろしく、ニューディール革命以後も地道に運動を続け、1980年代について国政を左右する思想の地位を得た。(39)

目の前に存在する矛盾を解決していくなかで思想を組み立て、時代に応じてその内容を変化させていくダイナミズムこそ、江田の社会主義思想やアメリカの保守主義だけでなくあらゆる政治思想が命脈を保つために必要な要素なのではないだろうか。

翻って、日本の社会主義者にはそのようなダイナミズムが存在したであろうか。海外の思想を絶対視して崇拜し、日本社会に現実に存在する矛盾を解決する中で理論を組み立てる努力を怠ってはいなかっただろうか。だからこそ、日本の社会主義思想は、戦後の思想界において大きな影響力を持ち続けたにもかかわらず、ソ連・東欧諸国において共産主義体制が崩壊するとあっけなく雲散霧消したのではないか。(もちろん、日本において社会主義思想の影響力が皆無になったとか、社会主義研究が完全になくなってしまったと言うつもりはない。しかし、ソ連崩壊以前に比べれば、その影響力や規模の大きさは全く微弱なものになったと言っても過言ではないだろう)

もちろん、日本の社会主義思想家の中には江田のような意識を持った人物がいなかったわけではない。米原謙によれば、社会主義協会の初代会長で江田の思想にも大きな影響力を与えた山川均の思想もまた、一つの考え方を絶対視せず、情勢の変化によって立場を変え得る柔軟性の高いものであったという。また、山川は資本主義の枠内での政策も十分社会主義社会を建設する一要素と考えており、構造改革論に通じる考え方をしていた。(40)

江田はこの山川の後継者を自ら任じていた節がある。佐々木派・社会主義協会と激しい派閥対立を繰り広げていたころ、江田は自らの派閥の機関誌に寄せた随筆の中で次のように書き残している。「山川先生が中心になってつくられた社会主義協会にはその前身、雑誌『労農』、『前進』の時代から参加してきたが、いまは離れて

いる。しかし、いまわたしは山川門下と思っ込んでいます。先生の著書をとくに読みかえし、自分の考えが間違っていないと信じている」「いまわたしは『構造改革論』を唱えているが、先生が生きておられたなら、的確なご指導がうけられるのに、と残念に思う。だが、わたしはこの路線が山川先生の示された道を大きく外れてはいないと信じている」(41)

江田や山川のような目の前に現実に存在する矛盾を認識し、そこから問題解決のための思想を構築していくという意識を今こそ、日本の社会主義者は身につけるべきである。なぜなら、ここ2~30年ほど思想界でもてはやされてきた新自由主義が現実世界において行き詰まりを見せ、再び資本主義に何らかの制約をかける必要が指摘されるようになってきているからである。

日本でも小林多喜二の『蟹工船』がベストセラーになったり、マルクス主義に関する著作が再び売れ始めたりという現象が起こっており、思想界における社会主義思想の影響力は今後、再び増大するであろう。この動きを一過性のものにせず、資本主義の暴走を食い止める対抗思想として社会主義が命脈を保つためにも、江田や山川といったかつての日本の社会主義思想家が残した豊富な蓄積から現在に応用できる思想をくみ上げていかななくてはならない。

特に、高度経済成長によって生じた豊かな社会における「新しい貧乏」の問題・公害に見られる環境破壊に取り組んだ江田の社会主義思想は、現代の日本社会が抱える諸問題を解決する上で指針となるであろう。なぜならば、これらの問題は、世界的に見れば豊かな日本社会に発生したワーキングプアのような新しい貧困の問題や医療崩壊などの社会資本の充実度における格差拡大、地球温暖化などの環境破壊など今日の我々が抱える問題に通じているからである。

そのダイナミズムだけでなく、江田の思想には現代の我々が学ぶべき点が数多く存在するのだ。

5. おわりに

江田はこれまでマルクス・レーニン主義に拘泥する社会党の中で珍しく、西欧型の社会民主主義思想を志向し続けた政治家というイメージが持たれてきた。

だが、これまで見てきたように、江田は1960年代までは条件付ながらプロレタリア独裁を認めるマルクス主義者であり、一般でイメージされているところの西欧型の社会民主主義になったのは、1970年代になってからであった。そして、それにもかかわらず、江田はたびたび自らの思想を表す言葉として「社会主義」という言葉を使用していた。彼が「社会主義」と呼ぶ思想の内容は時代の状況によって変遷しており、それがたまたま西欧の社会民主主義と同じ内容になったとしても、彼にとってはそれもまた1つの「社会主義」だったからである。「社会主義」が指す内容が変幻自在であったがゆえに、江田はあえて自分の思想的立場を「社会民主主義」と言い換える必要を認めなかったのかもしれない。本稿ではそのような時代に応じた江田の思想的変遷に現代社会において社会主義思想が生き残るヒントを見出した。

また、本稿では江田の思想には、高度経済成長の矛盾を明らかにし、それを修正することに社会主義の意義を見出そうという特徴があることを指摘した。特に高度経済成長の矛盾が明らかになった1970年代の江田の思想には、世界的な食糧不足や環境破壊の防止に関する考察や利潤の追求を主目的とする資本主義の暴走をいかに抑制するかという問題意識が含まれている。こうした問題は現代世界でもゆゆしき問題として広く議論されている問題であり、30年以上前にそうした問題について既に考察していたところに江田の思想の先駆性があったと言える。

しかし、それらの問題に対して江田はどのような処方箋を提示したのかという点については本稿で具体的に考察することが出来なかった。この問題に関しては別の機会に論じていきたいと思っている。

また、本稿では時間の制約などの関係で、その他の問題についても十分掘り下げることが出来ず、以下の課題を残した。

まず、高度経済成長期以降の江田の思想を対象を絞って考察したため、それ以前の時期に江田がどのような社会主義像を描いていたのか、明らかにすることが出来なかったことである。江田は1958年に社会党の組織委員長となり、社会党の組織問題に取り組むまでは、党内外では

農業問題の専門家として知られており、論考も農業問題が主で、己の信じる社会主義がどのようなものであるかといった問題について論考を残すことがほとんどなかった。しかし、江田の社会主義思想を形成する上で高度経済成長期以前の時代も非常に重要な時期であったはずであり、その点についても今後、深く考察する必要があるであろう。

さらに、山川が江田の思想にどのような影響を与え、江田が山川から具体的にどのような思想を継承したのかという問題である。江田の思想を考える上で、山川の影響は無視できないものがあつたと思われるが、これまで十分論じられてきたとは言えない。この問題に関しても別の機会に論じていきたいと思っている。

注

- (1) 大室一也「江田三郎没後30年に考える社会民主主義 『平等への思想』に再評価」『朝日新聞』2007年11月14日付朝刊。
- (2) 菅直人「江田さんの世代、社会主義とは社会正義と同義語ではなかったですか」北岡和義責任編集『政治家の人間力—江田三郎への手紙』明石書店、2007年、113ページ。
- (3) 空井護「野党指導者としての江田三郎」坂野潤治・新藤宗幸・小林正弥編『憲政の政治学』東京大学出版会、2006年。この要約が北岡責任編集、前掲書にも掲載されている。また、他に山本崇記「新自由主義の政治過程—現代政治における日本社会党構造改革派・構造改革論の意味」社会政策学会第112回大会（2006年6月4日）における口頭報告、「現代政治における日本社会党構造改革派・構造改革論の意味—政治的主体形成の諸課題」第29回戦後期社会党史研究会（2006年7月28日）における口頭報告があるが、管見の限り、未だ活字化されていない。そのため、本稿では引用・批評等はおこなわない。
- (4) 「日本社会党第19回臨時全国大会議案」1960年10月（国立国会図書館憲政資料室所蔵『和田博雄文書』311）
- (5) 江田三郎「今年のわれわれの課題」『月刊社会党』43号（1961年1月）。
- (6) 石川真澄『人物戦後政治』岩波書店、1997年、108~109ページ。
- (7) 日本社会党総務局総務部編『'62年の進路 第21回党大会決定集』日本社会党機関紙局、1962年、28ページ。
- (8) 空井、前掲論文、158~159ページ。
- (9) 同上、161~164ページ。

- (10) 久野収・江田三郎「日本の社会主義と国民運動」『世界』277号(1968年12月)、50ページ。
- (11) 江田三郎「新しい社会主義と日本の現実—『日本の社会主義』をめぐる—(インタビュー)」『経済評論』16巻12号(1967年11月)、107ページ。
- (12) 高橋勉『資料 社会党河上派の軌跡』三一書房、1996年、355・405・484ページ。鈴木は雑誌のインタビューで「書記長は2年で交代」と述べている。「日本社会党の行く道 前委員長・鈴木茂三郎氏に聞く」『朝日ジャーナル』2巻14号(1960年4月3日)、13ページ。
- (13) 清水慎三が中北浩爾(立教大学教授)のインタビューに答えている。中北浩爾「戦後日本における社会民主主義政党の分裂と政策距離の拡大—日本社会党(1955—1964年)を中心として—」『国家学会雑誌』106巻11・12号(1993年12月)、105ページ。中北浩爾「晩年の清水先生との交流」刊行委員会編『君子蘭の花蔭に—清水慎三氏の思い出』平原社、1997年、236ページ。
- (14) 小石幸雄「江田ブームとジュサーブーム」『江田三郎』刊行会編『江田三郎—そのロマンと追想—』同刊行会、1979年、321ページ。
- (15) 鈴木徹三「鈴木茂三郎(29)」『月刊社会党』282号(1980年3月)、238ページ。
- (16) この時の演説は、“Secretary-General Eda’s Report Delivered in Nikko on July 27 and 28”, *Japan Socialist Review*, Dec.1, 1962で読むことが出来る。
- (17) 江田三郎「社会主義の新しいビジョン」『エコノミスト』40年41号(1962年10月19日)。
- (18) 加藤宣幸へのインタビュー。(2008年8月26日)
- (19) 『勝間田清一政治談話録音速記録』(国立国会図書館憲政資料室所蔵)、109ページ。
- (20) 江田三郎ほか「〈討論〉社会党の機構改革をめぐる」『社会主義』84号(1958年8月)、7ページ。
- (21) 石河康国「社会党内の思想闘争開始」上野建一・今村稔・石川康国『山川均・向坂逸郎外伝 労農派1925-1985(下)』社会主義協会、2004年、49~50ページ。
- (22) 江田三郎「社会党は立ち直りつつある」『社会主義』106号(1960年7月)、5ページ。
- (23) 「国民みんなに牛乳三合一—その生産、消費生活のすべて—」『月刊社会党』42号(1960年11・12月)。
- (24) 江田三郎『日本の社会主義』日本評論社、1967年、9ページ。
- (25) 仲井富「過去を語らず未来をめざす—江田三郎との57年間」北岡責任編集、前掲書、224~225ページ。
- (26) 河村直幸「現代日本の選挙キャンペーン広告史—草創期—」『現代社会文化研究』(新潟大学大学院)21号(2001年8月)、13ページ。
- (27) 江田三郎『私の日本改造構想』読売新聞社、1972年、32ページ。
- (28) 同上、64~67ページ。社公民連合政権構想については、江田三郎「革新連合政権の樹立をめざして」『月刊社会党』176号(1971年10月)で既に提唱していた。
- (29) 同上、76~82ページ。
- (30) 江田三郎「革新連合政権の樹立をめざして」『資料平和経済』121号(1971年8月)、7ページ。
- (31) 国正武重編『「一票差」の人生—佐々木良作の証言—』朝日新聞社、1989年、176・187~188ページ。
- (32) たとえば、朝日新聞社編『地方権力』朝日新聞社、1974年、58~63ページ参照。
- (33) 江田三郎「党の再生を願ったが」『エコノミスト』48年54号(1970年12月22日)、60~61ページ。
- (34) 当時、社会党所属の国会議員は歳費の一部を党に納めており、それが党の収入の多くを占めていた。そのため、国会議員が激減したことで党の収入自体も激減してしまったのである。書記長であった江田は他派に範を示すために、まず江田派の職員に辞職を促さざるを得なかった。
- (35) 船橋成幸『〈証言〉戦後半世紀の政治過程—混迷のいま、21世紀のメッセージ—』明石書店、2001年、59~60ページ。
- (36) 瀬戸宏は江田離党のきっかけとなった第40回定期大会において江田が社会主義協会系の代議員から激しくヤジられた事件について、江田に責任があると主張している。現職の副委員長であるにもかかわらず中央執行委員会が作成した運動方針案に意見書を提出した江田の行為は組織規律に反するものであり、意見書を提出したいのならば、副委員長を辞職するか、自派の代議員を通すべきであったという。瀬戸宏「日本型社会民主主義について」『社会主義理論学会会報』第62号(2008年4月12日)、17ページ。
- (37) 石川真澄「中道、に倒れた江田三郎」『朝日ジャーナル』19巻23号(1977年6月3日)、91ページ。
- (38) 江田『日本の社会主義』(前掲)、4ページ。
- (39) 中岡望『アメリカ保守革命』中公新書ラクレ、2004年参照。
- (40) 米原謙「日本型社会民主主義の思想—左派理論の形成と展開」山口二郎・石川真澄編『日本社会党』日本経済評論社、2003年参照。
- (41) 江田三郎「〈くずいひつ〉山川先生と竹づつの米」『社会主義運動』第16号(1966年8・9月)、99ページ。

非常勤講師 icokano1@hop.ocn.ne.jp

「受理年月日 2008年9月24日」